

富士銀行の歩み

明治13年、合本安田銀行の創業に始まる富士銀行の119年の歴史は、近代日本の発展とともに歩んできたものです。明治維新と近代国家の建設に銀行家として多大な貢献を果たした安田善次郎の精神は、その後も1世紀以上にわたり多くの行員たちによって受け継がれています。

21世紀の到来とともに新しい指標をめざして日本経済全体が動きはじめようとしている今、日本経済の歴史の変遷を改めて見直してみるのも大いに意味あるものと思われます。

明治の「安田銀行」から今日の「富士銀行」へ、激動の時代とともに歩んできたその大いなる軌跡を振り返ってみました。



明治45年当時の安田銀行本店

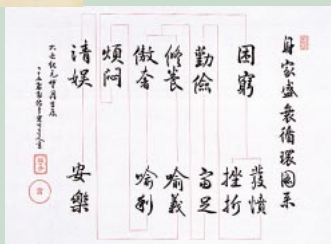


創業時代の貯金箱、小切手複記打抜器、帳簿など

下名十一行は来る十一月一日を以て株式会社安田銀行と合併し同時に其商號を株式会社安田銀行と改め支店百六十箇所を設け別種き従前の通り商業可成盛況を遂げ御奉進候
大正十二年一月

安田銀行
第三銀行
明治商業銀行
信濃銀行
同 東京銀行
同 百三銀行
同 日本商業銀行
同 肥後銀行
同 根室銀行
同 神奈川銀行

安田関係11行の大合同で、わが国最大の新安田銀行誕生（大正12年）



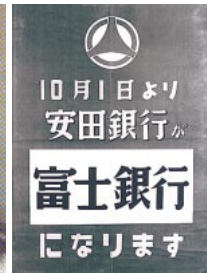
安田善次郎の人生訓「身家盛衰循環図系」

明治時代の到来とともに
安田銀行を創業、今日の
富士銀行の基礎を築いた善次郎

元治元年(1864年)、日本橋人形町通り(現在の中央区堀留町)に乾物兼両替店「安田屋」が開業しました。資本金は25両、創業者はまだ25歳の安田善次郎です。2年後の慶応2年、日本橋小舟町に移って「安田商店」と改称。善次郎は発足したばかりでまだ信用力のない明治新政府の不換紙幣や公債を率先して引き受け、その流通に積極的に協力します。その結果、安田商店の業績は大いに伸び、高い信用を得ることに成功しました。幕末・維新の動乱の中で、本格的な両替商とし



創業者 安田 善次郎



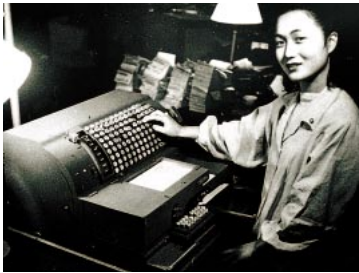
新生富士銀行誕生のポスター（昭和23年）

ての地位を築いていったのです。

明治13年(1880年)、安田商店を合本安田銀行に改組、資本金20万円、従業員31人、店舗数3の銀行業がスタート。ここから富士銀行119年の歴史が始まります。銀行家・善次郎は「社会、国家の発展のためには、公共的の事業が不可欠である」という使命感を生涯を通して貫き、築港や鉄道などの大規模な公共事業に積極的に資金を提供しました。これが東京市や大阪市など地方自治体の信頼獲得につながり、のちの「公金の富士」の名声を築く基盤となっていたのです。

戦後の混乱の中から、
時代のニーズを捉えた
日本最大の新安田銀行発足

明治から大正にかけては、第一次世界大戦や関東大震災後の不況と混乱の中で、金融再編成をはじめ産業の近代化が求められた時代でした。中小の銀行が数多く乱立したものの、その大半が資金力・信用力に乏しいために、経済変動の影響を受けて経営難に陥りました。安田銀行は、これらの銀行を援助し、時には吸収や合併を行い、預金者の救済にあたったのです。そして大正12年(1923年)、これら安田関係の11行が大合同し、新安田銀行として再発足することとなります。これによ



当座預金記帳会計機導入（昭和26年）



ロンドン支店のあったフィンスベリーサーカスのビル（昭和29年ごろ）

り、資本金1億5,000万円、預金5億4,200万円、貸出5億2,100万円、店舗数211、従業員数約3,700人のわが国最大の銀行が誕生することとなったのです。

この大合同は、時代のニーズを真に捉えたものでした。各種公共事業への出資や公債の引き受けとともに、民間事業の育成にも尽力した善次郎の精神は、後継者たちによって受け継がれていきました。積極的に事業金融に取り組み、実績を築いた安田銀行の足跡は、まさに日本の近代化とともに刻まれた歴史なのです。

いつの時代も、「広く開かれた、
みなさまの銀行を目ざす」
富士銀行

昭和23年(1948年)、戦後の財閥解体という時代の流れの中で、安田銀行は「富士銀行」として生まれ変わりました。新しい「富士」の名前は、「美観と品格が日本一で、古くから日本人に親しまれ、外国にも広く知られ、新しい時代の到来にふさわしい」との理由により、行員によるアンケートの結果、選ばれたものです。また、新しい行名とともに定められた「広く開かれた、みなさまの銀行を目ざす」という経営姿勢は今日も変わることなく受け継がれています。

うになったのです。それまでも「みなさまの富士銀行」として親しみやすさをモットーにしてきた当行は、昭和35年の創業80周年を機に、「カラコロ富士へ」をキャッチフレーズに、気軽に下駄ばきで来店いただける銀行のイメージづくりと個人のお客さま向けの商品開発に力を注ぐようになりました。

また、事務処理の合理化・近代化にいち早く着手し、昭和34年にはコンピュータ、昭和42年にはオンラインシステムの導入など、事務作業の機械化が進められていきました。



「カラコロ富士へ」の広告（昭和35年ごろ）

富士銀行が誕生した当時の規模は、資本金13億5,000万円、預金395億円、貸出289億円、店舗数189、従業員数7,899人でした。第二次世界大戦の終焉とともに新たなスタートを切った富士銀行は、多大なダメージを受けた日本経済の復興に協力したのです。

より一層、親しまれる銀行を
めざして、個人のお客さま向けの
商品開発を強化

高度経済成長期の昭和30年代に入ると、産業界の好景気は個人所得の増大と平均化をもたらしました。テレビ、洗濯機、冷蔵庫が「三種の神器」といわれる高度大衆消費社会が出現し、個人のお客さまの重要性がますます認識されるよ

日本を代表する銀行として、
早くから海外拠点網を整備

昭和40年代になると、日本企業の海外進出やユーロ市場の拡大など、国内外の経済動向の影響を受けて、銀行業界にも本格的な国際化の波が押し寄せてきました。

当行では、昭和27年(1952年)、戦後初の海外拠点であるロンドン支店を開設、翌昭和28年にはアジアの拠点としてカルカッタ駐在員事務所を開設するなど、早くから国際化時代を見越した海外活動を展開してきました。そして昭和40年代には、アメリカ、スイス、東南アジアなど世界各国に支店・駐在事務所の開設や現地法人の設立など、海外拠点網を整備すると



沿 革

もに、外国銀行との提携を精力的に推し進め、日本を代表する銀行としての海外業務体制づくりを構築していったのです。

お客様の高度で多様なニーズに即した最適なサービスを提供

昭和60年代になると、金融自由化や金融再編成が一層進み、銀行を取り巻く環境も大きく様変わりしました。とくに、平成9年(1997年)以降、「日本版ビッグバン」と呼ばれる金融市場の構造改革が本格

化してからは、業態間の垣根が取り払われ、海外の金融機関を含めた全く新しい競争の時代に突入しました。

一方、経済のボーダレス化が進み、インフォメーション・テクノロジーが飛躍的に進展した結果、銀行の業

務も一層高度化・多様化を極めていきます。しかも、このような状況において、国内外を問わずお客様のニーズは、ますます高度で多様化してきています。

当行では、そのようなお客さま一人ひとりのニーズに応じた最適な商品・サービスの拡充に努めるとともに、情報革新を活用した利便性の高いサービスチャネルの拡充に努めています。

平成12年9月からは、当行、第一勧業銀行および日本興業銀行は、21世紀に向けて飛翔する新しい総合金融グループ「みずほフィナンシャルグループ」として、皆さまの期待に応えていきたいと考えています。



「カラコ富士へ」の広告
(昭和35年ごろ)

明治13年 1月	合本安田銀行として創業
明治26年 7月	合資会社安田銀行に改組
明治33年10月	合名会社安田銀行に改組
明治45年 1月	株式会社安田銀行に改組
大正12年 7月	合同の母体として株式会社保善銀行を設立
大正12年11月	株式会社保善銀行に株式会社安田銀行以下11行が合併、同時に商号を株式会社安田銀行に変更
昭和18年 4月	株式会社日本昼夜銀行を合併
昭和19年 8月	株式会社昭和銀行を合併、株式会社第三銀行の営業を譲受け
昭和23年10月	商号を株式会社富士銀行と改称
昭和24年 5月	東京・大阪両証券取引所に株式を上場 (その後昭和24年8月京都、昭和25年4月札幌両証券取引所に株式を上場)
昭和24年11月	外国為替銀行として認可
昭和41年 9月	現在の本店完成
昭和44年 5月	芙蓉総合リース株式会社を設立
昭和47年 6月	株式会社スイス富士銀行を設立
昭和48年 6月	日本抵当証券株式会社を設立
昭和48年 7月	富士インターナショナル・ファイナンス・ピーエルシーを設立
昭和49年11月	富士銀行信託会社を設立
昭和49年11月	信用保証サービス株式会社(現株式会社富士銀クレジット)を設立
昭和53年 4月	富士銀ファクター株式会社を設立
昭和58年 4月	公共債窓口販売業務開始
昭和59年 1月	ウォルター・イー・ヘラー・アンド・カンパニー(現ヘラー・フィナンシャル・インク)およびその関連会社を買収
昭和60年 7月	富士銀投資顧問株式会社(現富士投信投資顧問株式会社)を設立
昭和62年 9月	ロンドン証券取引所に株式を上場 (その後昭和63年11月パリ証券取引所に株式を上場)
平成元年 1月	富士キャピタル・マーケット・コーポレーションを設立
平成元年12月	クライノート・ベンソン社の米国プライマリー・ディーラー子会社(現富士セキュリティーズ・インク)買収
平成 4年12月	ヘラー・インターナショナル・ホールディングズ・インク(現ヘラー・インターナショナル・グループ・インク)を設立
平成 6年10月	富士証券株式会社を設立
平成 8年 6月	富士信託銀行株式会社を設立
平成10年 1月	富士アメリカ・ホールディングズ・インクを設立
平成10年 5月	ニューヨーク証券取引所にヘラー・フィナンシャル・インク株式を上場
平成10年10月	富士フューチャーズ・インクを設立
平成11年 3月	安田信託銀行株式会社の第三者割当増資を引き受け子会社化
平成11年 4月	富士信託銀行株式会社および第一勧業信託銀行株式会社を合併、商号を第一勧業富士信託銀行株式会社に変更

(平成12年3月末現在、国内本支店277(うち振込専用支店5)国内出張所30、代理店3、海外支店17、海外出張所3、海外駐在隠事務所9)